

氏名(本籍)	しも だ しょう へい 下 田 章 平 (北 海 道)		
学位の種類	博 士 (芸 術 学)		
学位記番号	博 甲 第 5135 号		
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	唐代「狂草」の研究 - 伝存作品に関する考察を中心として -		
主 査	筑波大学教授	博士(芸術学)	岡 崎 昭 夫
副 査	筑波大学教授	博士(芸術学)	守 屋 正 彦
副 査	筑波大学教授	博士(芸術学)	中 村 伸 夫
副 査	筑波大学准教授	博士(文学)	八 木 春 生

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

極端に文字をくずして連綿させた狂逸な草書「狂草」は、中国唐代の開元・天宝期に活躍した張旭や懷素によって始められ、その後、高閑や垂栖らの僧侶によって受け継がれた。絵画における「逸品画」などとともに、転換期の革新的な芸術表現の一つとされてきたものである。

本論文は、肉筆および法帖の作例が伝存する張旭、懷素、高閑の三大家にスポットをあて、それぞれの作例に見られる表現様式について多面的な角度から分析を加え、「狂草」とはいかなる書表現であったかについて実態解明を試み、中国書法史土における意義と役割について考察することを目的としたものである。

(対象と方法)

本論文における主たる研究対象は、張旭、懷素、高閑の三大家がのこした肉筆および法帖の伝存作例であり、これを縦軸とし、また三大家の書について言及した同時代および後世の人々による評論的な文献をも対象とし、これを横軸としている。方法としては、まず上記の両面について、それぞれに史料批判的な視点を重視して整理と分析を加え、ついで両面を交合させて考察の深化を図り、作品そのものの真偽に関する究明を踏まえた上で、「狂草」の表現を多面的な角度から考究し、この様式がもつ書表現の歴史の上での独創性について論述している。

以下のような構成により考察がなされた。

序章 本論文の課題

第1章 張旭の草書について

第2章 懷素の草書について

第3章 高閑の草書について

結語

(結果と考察)

第1章では、張旭の伝存作品である<自言帖>や<古詩四帖>について、内容および書法の様式から検討

を加え、これらの作品は真跡とみなすことのできないものであることを明らかにし、他方、〈淳化閣帖〉所収の〈晚復帖〉などの資料的価値を再評価している。また、文献の記述により、北宋以前と以降では、張旭の書に対する見解に大きな相違があることを指摘した上で、伝統的な草書は紙や絹に、「狂草」は壁面や屏風に、という二面性が存在したことを導き出している。

第2章では、懷素の伝存作品である〈苦筍帖〉や〈自叙帖〉を対象にして、第1章と同様の方法で資料的価値を確定し、文献の記述から、やはり揮毫における二面性が認められるとする。特に「狂草」は飲酒や叫び声をともなったパフォーマンス性をもつ制作行為であったものと結論づけている。

第3章では、高閑の伝存作品である〈此齋帖〉や〈千字文〉について資料的価値を見極め、文献の記述をもふくめて考察した結果、従来の研究で言われてきたように、高閑を張旭や懷素に次ぐ「狂草」の継承者と見なすことはできないという結論に達している。

書法は筆勢の効果いかんによって、表現結果が大きく左右される芸術である。唐代に流行した「狂草」は、ことさらに筆勢を誇示し、極端なまでに文字の大きさや肥瘦の変化をともなう表現であったが、これは観衆を意識したパフォーマンス性のあらわれに他ならないとするのが主たる結論であり、しかもそれは伝統的な草書の書法が徐々に変遷した結果ではなく、時代の風尚を背景にして突如あらわれた表現様式であり、五代以降、特に明清時代の多くの能書家によって紙や絹の横巻に揮毫されるようになった先駆的事象であったとする。

審査の結果の要旨

中国書法における草書表現の特異な様式である「狂草」は、その初期的萌芽を今から二千年近く前の漢代に求めることができるが、著名な能書家による書作品の様式として定着したのは、はるか後世の唐代中期のことであった。字形は大小・長短・粗密・斜正など変化のかぎりを尽くし、書法以外の物象に発想を求め、壁や屏風などに一気呵成に書いたものであり、「静」の表現を重んずる伝統書法に対して、逆に最も「動的な表現手段であった。

本論文は、みずからも草書表現を得意とする著者が、伝存する幾多の肉筆および拓本の作品を隈なく調査して、真偽の問題をふまえて表現様式について考察し、合わせて、これまで断片的かつ解題的なものにすぎなかった「狂草」に関する先行文献を博搜してその内容を批判的に分析し、「狂草」とはどのような表現様式であったかについて仔細に検討した労作として高く評価できる。パフォーマンス性については仮説の域にとどまり、必ずしも説得力のある論証には至っていない。しかし、隋代から南宋までの伝存作品や〈敦煌文書〉の遺品をも検討範囲にふくめた広い視点から「狂草」の様式を浮き彫りにしようと試みた論考はこれまでになく、「狂草」研究の領域に新たな成果をもたらしたものと見える。今後は、現代にまで連なる「狂草」作家の作例をも含めた実態解明に着手し、より広い視野と多角的な視点をもって「狂草」研究を継続することを期待したい。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。